

創造的リンクとしての俳句

夏石番矢 日本

Ban'ya Natsuishi Japan

十年前の二〇〇〇年九月、中欧のスロヴェニアで、私たちは世界俳句協会を創立した。「世界俳句」の概念とその活動は、したがって十年間の歴史を持つことになる。それほど長くはないが、短くもない期間である。

また、試行錯誤を繰り返しながら、『世界俳句二〇〇五 第一号』（西田書店、東京）を編集し、二〇〇四年十一月に出版した。この多言語からなる年間出版は、二〇一〇年一月には『世界俳句二〇一〇 第六号』（七月堂、東京）へと続いた。

この十年間、「世界俳句」の創出過程において、私たちは数え切れないほどの予期せぬ出来事を体験した。なかでも最も目覚ましい成果の一つは、言うまでもなく本年の欧州文化首都(EU が指定した加盟国の都市で、一年間にわたり集中的に各種の文化行事を展開する事業)の一つであり、魅力的なハンガリーの都市、当地ペーチでの世界俳句フェスティバル・ペーチ二〇一〇の開催である。二〇〇九年には、リトアニアのドルスキニンカイとヴィルニウスで、第二〇回ドルスキニンカイ詩の秋と第五回世界俳句協会大会二〇〇九を共同開催した。ヴィルニウスは欧州文化首都二〇〇九だった。

さらに、成功裏に終了したこれらの国際的俳句イベントに加え、二〇〇九年末には、ヘルマン・ヴァン・ロンプイユ初代 EU 大統領が、オランダ語での俳句創作を趣味としていることを公表した。同大統領は、第一句集を出版しただけでなく、俳句創作に捧げた自分のブログも更新している。このように、俳句は毎年、確実に世界中、特に欧州で、より多くの人々に受け入れられ、承認されつつある。

もちろん、俳句の国際的な地位がこのように高く向上することは、私たちにとってたいへん喜ばしいことだ。

とはいえ、私たちが俳句を個人的あるいは社会的な趣味としてだけでなく、創作的な詩としても促進しているとすれば、これら十年間に創作された俳句作品の質、多様性そして特徴をも検証する必要がある。

私はペーチで俳句ワークショップを開くという機会に恵まれたが、この栄光ある機会に、これまでに出版した出版六冊、すなわち『世界俳句二〇〇五 第一号』から『世界俳句二〇一〇 第六号』までについてのコメントを述べさせていただきたい。これら六冊は、まさしく私たちの血と汗と涙の結晶であり、世界中の俳人に対し、よりよい俳句創作のための提言を差し出せるであろうからだ。

たとえ、俳句が季語を使わず創作されているとしても、これら『世界俳句』六冊に収録されている俳句の大半は牧歌である。このため、全冊を通して多種多様な牧歌的俳句を楽しめる。

その第一例として、二〇〇五年に第三回世界俳句協会大会が開催されたブルガリアからの俳句を紹介しよう。

死んだ影たち／稲は伸びる／宇宙が来る

ペパ・コンドヴァ ブルガリア (『世界俳句二〇〇五 第一号』、三五ページ)

ペパ・コンドヴァの作風は、洗練されず、断片的で、素朴だ。しかし、逆説的になるが、掲出の一句は、非常に詩的で、宇宙的である。この俳句では、「死んだ影たち」という第一行は、かなり衝撃的だ。「稲」とは別個の「死んだ影たち」が、「稲」に活気を与えていることを、この俳句は示唆し、さらに「宇宙」が、この地上で分離されているものたちを結びつけるためにやってくるのである。

別の言い方をすれば、日常的語彙では密接な関係のない「影」「稲」そして「宇宙」という三つのキーワードが、ことばによる宇宙をうち建て、そしてそれが私たちの想像力を著しく活性化し、私たちの魂をより

元気づける。

四方を山に囲まれたネパールからの俳句は、独特の田園風景をありありと喚起する。

鳩の巣のへ／滑り落ちる月／かすんだパズル

バム・デヴ・シャーマ ネパール (『世界俳句二〇〇五 第二号』、七月堂、東京、二〇〇五年、四四ページ)

「かすんだパズル」という表現は、月と鳩たちが水蒸気の中で共存していることを私たちに教える。そして、「水蒸気」は、そこが水の豊富な環境だということも暗示する。

しばしば俳句作品において、月と鳥の巣との組み合わせは見かけられるが、ネパールの詩人による俳句では、月が巣の中で動いているのである。そこが素晴らしい。さらに、最終行の「かすんだパズル」は、この句全体に広がりとして謎めいた雰囲気を生じさせている。

オーストラリアで生まれた次の俳句は、きわめて単純だ。

静かな木／空は／君を揺り動かす

グラント・コールドウェル オーストラリア (『世界俳句二〇〇五 第三号』、七月堂、東京、二〇〇七年、一〇ページ)

掲出の俳句では、単純で短い単語が、とても魅力的なことばの宇宙を構成している。「木」「空」「君」という三単語は、純粋な感覚に満ちあふれたことばの世界を生み出したのである。

日本の俳人による牧歌的俳句は、その長年の歴史の過程で多くの進展を遂げた結果、より創造的で、より陰影に富んでいるかもしれない。

影はみな祈りのしぐさ花菖蒲

中村武男 日本 (『世界俳句二〇〇七 第三号』、三三ページ)

ため息が集まっている春の雲

秋尾敏 日本 (『世界俳句二〇〇八 第四号』、七月堂、東京、二〇〇五年、七ページ)

冬銀河蛇行の溪へ流れ込む

松本勇二 日本 (『世界俳句二〇〇八 第四号』、三二ページ)

鳥を入れ夕日を入れる雲は無敵

鎌倉佐弓 日本 (『世界俳句二〇〇九 第五号』、七月堂、東京、二〇〇九年、二四ページ)

飛魚の滞空時間星ふやす

市川唯子 日本 (『世界俳句二〇一〇 第六号』、二三ページ)

これら一連の牧歌的俳句は、個別にかつ繊細に観察された自然と、集中的にかつ密やかに表現された感情との、見事な調和を保った融合となっている。たとえば、秋尾敏の句の第一行の「ため息」は、ただ単に架空のメタファーではなく、「春の雲」という陰影のある雰囲気とともに、作者の繊細な心情をも描いている。

また、鎌倉佐弓の俳句では、「雲は無敵」は、気象現象だけではなく、彼女の心情表現ともなっている。

一方、純真無垢な子どもは、どの言語でもすぐれた俳人になりえる。オセアニアからの俳句がそれを証明している。

オセアニアの／青いキャンバス／ダイヤモンドの空

キイロイ・ユメトブ ニュージーランド (『世界俳句二〇〇七 第三号』、六四ページ)

この若いニュージーランド人は、自然を奇跡的なものとして表現するために、「ダイヤモンド」と「空」という単語の驚異的なリンクを発見した。

このように、さまざまな国々からのすぐれた牧歌的俳句はどれも、自然界の事物のあいだの、そして事物と人間とのあいだの、新しいリンクを含んでいる。俳人たちによって新しく発見されたこれら一連のリンク、また、俳句作品において新しくうち建てられたリンクは、「世界俳句」の第一の成果である。俳句創作において、牧歌はいまなお重要な基盤であると言えよう。

しかしもう一方で、牧歌的短詩から離れて、多くの俳人が、自分自身を含めた人間をテーマに句を作っている。

痛み／そのなかに／無限

アレクサンドラ・イヴォイロヴァ ブルガリア (『世界俳句二〇〇五 第一号』、二七ページ)

この俳句は、私にとっては、『世界俳句』全六冊のなかで、最も印象深い俳句の一つである。「痛み」という単語は、「無限」と連結すると、最大の内実で満たされる。成功した俳句では、一つのキーワードが、十分に強調され、しっかりと焦点を当てられる。この「痛み」は、「無限」という単語を通じて、宇宙全体とつながっている。この俳句において、「痛み」と宇宙のリンクは、発見され、固定されている。

雪の結晶／心とからだ／別ならず

ジャック・ガルミッツ 米国 (『世界俳句二〇〇七 第三号』(一六ページ)

この作品は、一個人における心身一体の至福への、人間的な願望の結晶である。俳句作品は、人間の欲望、願望などを結晶化することができる。このニューヨークの俳人は、雪と人間、また、「心とからだ」のあいだの貴重なリンクを発見したのである。

どんな空も／鷗の／飛行を制限できない

トニ・ピッチーニ イタリア (『世界俳句二〇〇七 第三号』、四〇ページ)

読者が容易に想像できるように、掲出の俳句の「鷗」は、人間を暗示している。このイタリア人は、大空における無限の飛行としての完全な自由を、俳句で詠んだ。

君の裸が／わが裸体のそばに／音楽それとも静寂？

カジミーロ・ド・ブリトー ポルトガル (『世界俳句二〇〇八 第四号』、一二ページ)

ポルトガルのエロスの詩人は、二人の裸体のあいだで響いている「音楽それとも静寂」を聴いている。これは、人類の肉体的存在に対する、大きなほめ歌である。この詩人は、二人の恋人の二つの裸体のあいだに、見えないリンクを発見し、それを「音楽それとも静寂」と表現しているのである。

光は剣／君の最も暗い根まで／斬らん

レオンス・ブリエディス ラトヴィア (『世界俳句二〇一〇 第六号』、一三ページ)

ラトヴィアの詩人、レオンス・ブリエディスは、人智に満ちた格言のような俳句を書いている。彼は自作俳句で、「光」は人間の外側をぱっと照らし出すのではなく、最も暗い心の内面まで深くえぐると述べている。ここでも、詩人の鋭い洞察力により、「光」と「君の最も暗い根」との思いがけないリンクがあばき出されている。

また、アフリカからの俳句のおかげで、「世界俳句」には新たな地平が開いた。

十の季節／十の絶望的な季節／新月

ナイジェリア俳人によるこの俳句は、私たちが慣れている四季とは全く違う別の気候があることを教えてくれ、また彼は自国において繰り返される季節に対する愛情と憎悪を表現している。それにもかかわらず、第三行に「新月」と書くことによって、自分自身とそこに生きることへの隠された希望との精神的リンクを見出すにいたる。

別の国に／別のレモンの木／わがまなざしは欲望

モハメッド・ベニス モロッコ (『世界俳句二〇〇七 第三号』、九ページ)

モロッコの詩人は、自分自身の果てしない地平の広がり为例示している。自分自身と「別の国に／別のレモンの木」とのあいだに存在する、はるかなリンクを、彼は発見した。このモロッコ詩人は、俳句作品と並はずれて広大な時空間をリンクさせたのだ。

一番高い滝／わが父の影の／三倍の長さ

ジェイコブ＝コビナ・アイアー＝メンサー ガーナ (『世界俳句二〇一〇 第六号』、一〇ページ)

ガーナの俳人が詠んだ俳句における、滝と彼の父とあいだの明確なリンクは、私たちが予想するほど単純なではない。「父の影」がここでは、重要な役目を果たしているからだ。おそらく、このリンクは、伝統的なアニミズム的コスモロジーに基づいたもので、より緊密でより深いリンクかもしれない。

最後に、ハンガリーで作らた実験的な俳句を取り上げたい。ことばの冒険は、創造的な俳句創作のよき友である。

湖の氷の上 ... 処女雪／... 穴傷の上—猫氷の上 ... イメージ ...／鷗たちの翼失敗

ジョーゼフ・ビーロー ハンガリー (『世界俳句二〇一〇 第六号』、一二ページ)

印刷上の空白を最大限活用したこの俳句は、ことばとことばのあいだの壊れやすく危機的なリンクから構成されている。したがって、ジョーゼフ・ビーローの俳句は、ふたしかなことばのリンクによる前衛的短詩となっている。

『世界俳句』全六冊に収録した俳句のうち、傑出したものすべてに言及するのは不可能だ。ここで私は、「リンク」に詩的な視点を集中させようと試みた。リンクとは、安定した関係ではなく、既存のコンビネーションでもなく、俳人が俳句と呼ばれる真正の短詩を創作したときはじめて見つけ出せる、密かで潜在的な架け橋である。卓越した俳人に見出された創造的なリンクは、以前よりずっと解放された宇宙へと読者を自由に運ぶ。